

『和歌伝授五字之大事』の成立と平間長雅

飯* 渕 由 美

一 はじめに

『和歌伝授五字之大事』とは、『国書総目録』において『超大極秘五字伝』の書名でも記載のある、望月長孝・平間長雅等の奥書を有する地下の伝授書である。内容は詠歌の眼目を五字で表し、証歌を掲げて解説したものである。日下幸男氏の『近世古今伝授史の研究 地下篇』（一九九八年・新典社刊）に内容の紹介はあるものの、これまでほとんど知られておらず、従って研究もほとんどなかった。しかし、近世の地下の和歌人口の拡大に大きな影響を及ぼす、これらいわゆる貞徳流の人々が、歌を詠む際に、何を肝要と考え実際にどのような歌を秀歌と捉えていたかを正しく理解することは、まだ手つかず状態のこの時代の地下の実作のあり方を解明するうえでも非常に有意義なことである。本稿では、従来触れられることのなかった『和歌伝授五字之大事』（以下『五字之大事』と略す。）の成立・伝本の系統・伝授における位置について考察することとする。

二 構成・形態

『五字之大事』は、序文・五字各々の秘伝・伝授奥書から成り立つ。五字各々の秘伝は、さらにそれぞれ二部に分かれ、前半の陰陽五行の密説で説かれた漢文部分と、後半の証歌を伴う漢字仮名混じり部分とで構成されている。五字全体が、陰陽五行の相生の考え方で循環するように書かれている。肝心の五字に関しては、○や△・◇等の記号で伏せ字の形をとる。伏せ字が何であるかは、一部類推できるものはあるものの、本文中には書かれてはいない。一番目の伏せ字△の項（以下、便宜上一章・第二章というように呼ぶ）では、景気的重要性、第二章△では、感深き歌を詠むこと、三章□では、新しき歌、四章◇では、金玉の詞、五章○では、秀句をとりあげている。

三 伝本

『国書総目録』・国文学研究資料館マイクロフィルム資料目録・『近世古今伝授の研究 地下篇』等から現在までに知り得た伝本は、次のとおりである。序文・五字各々の秘伝に関しては、内容に大きな違いはない。ただし、書写過程での語句の脱落と思しきもの・語順の相違等があり、幾つかの伝本ごとに一定の傾向が認められる。

①宮内庁書陵部本

外題『和歌伝授五字之大事』、内題『和歌点伝授五字之大事』（内題は、序の後に書かれたものをとる。）古今伝授資料十一。整理番号B6-735。宝永二年に長雅から北条氏朝に伝授された。『近世古今伝授史の研究 地下篇』によれば本文長隣筆、巻末一連の奥書は長雅筆。

②東京大学国文学研究室本（国文学研究資料館紙焼き）

外題『五字大事』、内題なし。整理番号1530。『連歌論書』の内の一本。『春樹顯秘鈔』・『和歌会席作法秘伝』・『詠歌大本秘訣』が合冊される。享保六年に長隣から小西宗朗に伝授された。

③柿衛文庫本（柿衛文庫紙焼き）

外題、内題なし。柿衛文庫目録書名『和歌五字之大事』。整理番号5212。序文から一章の途中までを欠いた残欠本。宝永三年長雅から井長如に伝授された。享保十三年莫然齋短山正言・延享三年赤井含章齋一貞・天明五年然住軒度会常典の奥書あり。

④宮内庁書陵部本

外題『詠歌大本五字之大事』、内題なし。整理番号B6-562。長雅からの宛名「キーワード」和歌伝授五字之大事／平間長雅／超大極秘五字伝／五字三義十一箇／詠歌大本秘訣

*平成二〇年度生 比較社会文化学専攻

なし。

⑤ノートルダム清心女子大本（国文学研究資料館紙焼き）

外題『歌道五字口訣』、内題なし。整理番号D129。長雅からの宛名なし。

⑥架蔵本

美濃判。共紙表紙の仮綴合本。料紙楮紙。表紙に『詠歌大概 全』と墨書。内題「五字秘伝」。「詠歌大概安心秘訣」・「超大極秘古今内伝受切紙口訣條々」・「古今和歌集伝授切紙」・「古今天真独朗之卷」が合冊される。長雅からの宛名なし。

⑦筑波大学図書館本（国文学研究資料館紙焼き）

外題『超大極秘五字伝』、内題なし。整理番号ル205-38。短山翁嘉珍・寛保元年の岡田宗殖の奥書あり。

⑧祐徳博物館中川文庫本（国文学研究資料館紙焼き）

外題『超大極秘五字伝』、内題なし。整理番号6-2-2-248。短山翁嘉珍・鍋島直郷の奥書あり。

⑨東京大学国語研究室本

外題『超大極秘五字伝』、内題なし。整理番号L20424。短山翁嘉珍の奥書あり。

⑩熊本大学図書館北岡本（未見）

外題『超大極秘五字伝』。整理番号8-2-甲50。目録では、「平間長雅より井長如への和歌の秘事口伝」とある。『近世古今伝授史の研究 地下篇』に長雅の奥書の引用あり。

②から⑩までは転写本であるのに対し、①は、奥書は長雅筆で、十本の伝本のうち長雅の著した元の形に最も近いと言えることから、以後の引用は、①を底本とする。外題もいろいろあるので本稿では、『国書総目録』にもある①の書名を用いることとした。表記の違いとして、五字各々の秘伝の後半部分が、①・⑤のみ漢字かな混じりで、未見⑩を除く残りの伝本は、漢字力タカナ混じりである。奥書にかなりの違いが見受けられ、それが伝本の系統分けにも繋がることから、次に奥書を検討したい。

四 奥書

未見⑩を除くすべての伝本に共通する奥書は、次の長孝の奥書である。（字配りは元のままでない。行変わりに／を入れて記す。引用は、①より。便宜上アルファベットの記号を付ける。なお、本稿の写本等の引用は、適宜通行字体に改めたことをあら

はじめお断りしておく。）

A 右之一巻者

五字之大事「面授口伝也此條無頭筆頭唯銘心中而已」

此口伝之内巨細而難銘心中文言／暫頭筆頭者也這目二條家／嫡々相承而大藏卿二位法印玄旨／逍遊軒明心居士高弟一人准／一子血脈伝来之趣也「以誓盟伝之謝礼等有格式」／然上者範其器門下一人之外／全不致漏脱之条如件／広沢隠士

延宝二甲寅天三月十八日 長孝

また、右奥書の後に、③と未見⑩以外には、共通する奥書が次のとおり続く。

B 詠歌大本超大極秘

五字之大事

／保能本乃止明石浦

／己奴比登乎松帆浦

以此両首成五字誠絶妙之／口訣一貫伝心之正理也非血脈／道統之人者莫許之矣／右者二條家嫡々相承之説方／一子血脈之口訣也大藏卿二位法印／玄旨逍遊軒明心居士各如瀉／一器之水一器雖為相続伝来／之極秘年来厚心篤実而／抛金玉殊憲其器故不違豪／厘今令附与之訖如誓盟猥／不可有漏脱者也／広沢隠士／長孝

C 詠歌之大本超大極秘

五字之大事「是点伝授也」

／ほのほのとあかしの浦の朝霧に／島かくれ行船をしそおもふ

／来ぬ人を松帆の浦の夕暖に／やくやもしほの身もこかれつゝ

此両首成五字

右者二條家嫡々相承之説方／絶妙之極秘而一貫伝心之／正理血脈道統之口訣也近來／大藏卿二位法印玄旨逍遊軒／明心居士広沢隠士狭々野屋／翁長孝居士代々如瀉一器水／一器令相続伝来也然則／道統之人品撰其器可許容／縦雖自身之一子非其器量者／全不令許免之規矩也且奉任／和歌三神之証明而已／風觀斎長雅

それでは、個々の奥書を見ていくこととする。①・②は、右に掲げた基本形以外に他の伝本に見られぬ「二首之伝」と定家の歌を選んだ理由が付け加えられている。

D 二首之伝

／ほのほのとあかしの浦

／来ぬ人をまつほの浦

右二首之歌ヲ以二條家代々説／方之骨肉家之相伝子々孫々／之龜鑑二備ヘラレタ

ルトソ其子細ハ／何レノ名歌秀逸モ五字全備／シタル歌無之然ルニ此二首一ツモ
／不欠万徳円満ナレハ口訣ニシテ／留メ置レタル也五字ニ当リヤウハ／相伝ノ上
ニテ工夫ヲ懲シ自悟／自得アレトノ掟也

此条雖為面授口伝銘心中／限暫顯筆頭者乎而后／可與丙丁之童子者也

E
先人ノ曰定家卿自身人丸之／神詠ニ比シ給ヘラレタルハ聊嗚呼ニ／似タレトモ定
家卿ノ事ハ和歌三尊ノ一人ニ加リ給ヘラレタルホトノ／広大ナル徳マシマセハ彼
来又人ヲ／松帆ノ浦ノ歌モ天然ト詠シ出サレ／タリサレハコソ百人一首ニモコノ
／歌ヲ自身入ラレタリ依之此二／首ヲ子々孫々ノ為ニ密勘シ留メ／給ヘラレタリ
全非為他人所／為トソ

そして、①では長雅の署名の後に次のように、伝授の年と宛名が続く。

宝永二乙酉歲

六喻（花押）

菊月吉辰

／（印「六喻居士」）（印「長雅」）

佐山太守平姓／氏朝尊丈夫

②では、Cの奥書が、内容は、ほぼ同じであるが、長隣のものである。以下に記す。

詠歌大本超大極秘

五字之大事「謂是点伝授」

／ほのぼのと明石浦

／こぬひとを松帆浦

此両首成五字

右者二條家嫡々相承之読方絶妙之／極秘而一貫伝心之正理血脉道統之口訣／也近
来大藏卿二位法印玄旨翁逍遊軒明心居士／広沢隠士狭々野屋翁長孝風観斎長雅／
代々如瀉一器水一器令相続伝来処也／然則道統之人品撰具器可許容縦／饒肉身之
一子非其器量者全不令許／免之規矩也且奉任／和歌三神之証明而已

不遠斎／長隣

享保六年丑歲晚冬吉辰

小西氏／宗朗丈／参

③では、Aの奥書の後に、宝永三年の井長如宛の長雅の奥書（時と宛名のみ）があ
り、その後には、正言以下の奥書が続く。

右五字一卷者大藏卿／二位法印玄旨翁逍遊／軒明心居士貞徳翁広／沢隠士狭々野
屋長孝／翁風観斎六喻居士長／雅翁的々相承之口傳／秘訣一器水如移一器／感厚
心篤実令附与之／訖如誓盟全無志人不／可有佗見漏脱者也

享保十三年九月朔日

莫然斎短山

正言判

常棟丈

右奥書代祖父筆之旨趣者／久志本氏於当道厚志之人／也昔短山在世之日要訣口
決傳之雖不殘此一卷猶殘／故嫡孫一貞繼祖父之命附／与之者也代々如奥書可被
珍重之者也

赤井含章斎

延享三年丙寅二月中旬 一貞判

久志本常典丈

右五字一卷者大藏卿二位法印／玄旨翁逍遊軒明心居士貞徳翁／広沢隠士狭々野屋
長孝翁風観／斎六喻居士長雅翁莫然斎短山／翁的々相承之口傳秘訣一器水／如移
一器感厚心篤実令附与之／訖如誓盟全無志人不／可有他見／漏脱者也

然住軒

天明五年七月 度会常典（花押）

南部／敏慎丈

④は、ABCの奥書はあるものの、宛名を欠く。④から⑨までの奥書Cの「五字之
大事」の下の部分には、①②には見あたらず「有八通之切紙」の記載がある。この「八
通之切紙」と思しきものは、熊本大学図書館北岡文庫に存在する。（『五字之大事七通
之切紙伝附五字之大事図』『国文学研究資料館マイクログフィルム』）

⑤もABCの奥書を有するものの、宛名を欠く。長雅の奥書が、「延宝三乙卯季陽
月吉辰」とある。

⑥もABCの奥書の後の宛名を欠く。しかし、いっしょに合冊されている「超大極
秘古今内伝受切紙口訣條々」に嘉珍の原奥書があることから、嘉珍に伝授されたもの
の系統と推測される。

⑦は、ABCの後に次のように続く。

先師長雅より相伝五字の口授の趣以近ぬしへ／申伝へ申すべし 短山翁嘉珍在判
右從磯波翁岡田正利翁拝写之乎可秘可慎

寛保元年酉年四月二十九日

岡田宗殖記之

⑧は、ABCの後に次のように続く。

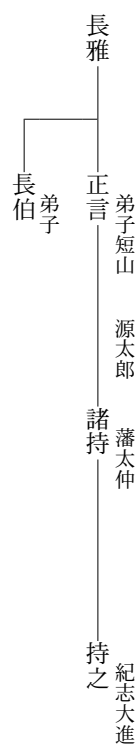
先師長雅より相伝五字の口授の趣以近／ぬしへ申伝へ申すべし 短山翁嘉珍在判

磯浪老翁より寛保のはしめのとし弥生／なかは六日に伝へうけぬまことに是／歌道の極秘なるかなみたりに／外見をゆるさぬこと也

雲垣子／直郷（花押）

⑨は、A B Cの後に次のように続く。

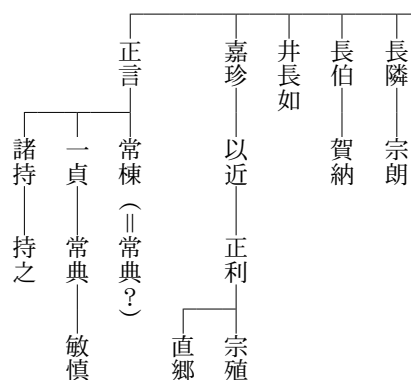
先師長雅より相伝五字の口授の趣以近ぬしへ申し伝へ申すべし
二條家古今伝之系記（以下は、長雅以降の抜粋）
短山翁／嘉珍



五 奥書から推定される伝流の過程

- | | | | |
|------|--------|--------------------|---------------------|
| 延宝二 | (二六七四) | 望月長孝—平間長雅 | *諸本 |
| 宝永二 | (二七〇五) | 平間長雅—北条氏朝 | ① |
| 宝永三 | (二七〇六) | 平間長雅—井長如 | ③⑩ |
| 某年 | | 平間長雅—水田長隣 | ② |
| 某年 | | 平間長雅—嘉珍 | ⑦⑧⑨ |
| 某年 | | 平間長雅—短山正言 | ③ |
| 享保六 | (二七二一) | 水田長隣—小西宗朗 | ② |
| 某年 | | 短山正言—赤井含章齋一貞 | ③ |
| 某年 | | 短山翁嘉珍—以近 | ⑦⑧⑨ |
| 某年 | | 短山正言—諸持 | ⑨ |
| 享保十三 | (二七二八) | 莫然齋短山(正言)—常棟 | ③ |
| 享保十九 | (二七三四) | 有賀長伯—円山賀納 | 『人物百談』 ^① |
| 某年 | | 以近—磯波翁岡田正利 | ⑦⑧ |
| 某年 | | 諸持—持之 | ⑨ |
| 寬保元 | (二七四一) | 磯波翁岡田正利—岡田宗殖 | ⑦ |
| 寬保元 | (二七四二) | 磯波翁—鍋島直郷 | ⑧ |
| 延享三 | (二七四六) | 赤井含章齋一貞(短山孫)—久志本常典 | ③ |
| 天明五 | (二七八五) | 然住軒度会(久志本)常典—南部敏慎 | ③ |

二条家相承——幽斎——貞徳——長孝——長雅——氏朝



（ただし、嘉珍と短山は同一人物か）

六 伝本の分類

伝本は、基本的には、長雅から誰に伝授されたかによって分類できる。しかし宛名のないものもあることから、それらは、書写過程での語句の脱落と思しきものや、語順の相違等から検討を加えたい。

順の相違等から検討を加えたい。

紙焼き等が手元にある①から⑨までを比較してみた。○は、有り。×は、無し。△は、後から書き加えられたもの。

＊書写過程での脱落と思しき語句

一章 至ルと至らざる

二章
歌に

三章 爰に大事あり

四章 礼義已

五章 此境大事也

＊語順の相違

三章 風情を改めて新しくなす也

三章 誠にめつらしくうつくしき詞也此目聞ゝ大事也

正	正	○	○	○	○	①
正	正	○	○	○	○	②
正	逆	○	○	○	○	③
逆	逆	△	△	×	○	④
逆	逆	△	△	×	○	⑤
逆	逆	×	×	×	×	⑥
逆	逆	×	×	×	×	⑦
逆	逆	×	×	×	○	⑧
逆	逆	×	×	×	○	⑨

* 語句の違い

第二章 其月花そはさまにならず○・其月花アサマニナラス×
五章 古めかしくて古きにはをとり○
フルヒレテナキニハフトリ×

これらの傾向を見ると、①②③と④⑤⑥⑦⑧⑨の間は、二つに分かれていることに気が付く。そして、宛名の書かれていない④⑤は、どちらかといえば、⑥⑦⑧⑨に近い伝本であることがわかる。しかも、どちらも、後から①②③よりの本を見て訂正していることが推測される。⑥⑦⑧⑨は、嘉珍に伝わった伝本である。①は氏朝、②は、長隣、③⑩は、井長如に伝わったものである。断定はできないものの、④⑤は、嘉珍に伝わった伝本の系統の可能性が高い。

七 成立

では、この『五字之大事』はどういう過程を経て現在見ることでできる形となったのか考察したい。奥書によれば、二条家伝来のものが、幽斎・貞徳を経て長孝・長雅に伝わったとある。貞徳の時までは、口伝であり、長孝が伝える時に初めて文面に記されたところがある。現在目にする形がいつできあがったかを考える手がかりとして、本文中にある証歌の存在がある。全部で三十二首ある証歌のうち、時を特定できる歌が存在する。「近き此の歌」・「頃日の人の歌」である。この九首の「頃日の人の歌」の出典や作者が判明すれば、最終的な成立年代も特定できるのではないかと考えた。そこで三十二首の出典を調べると次のようになった。

①時の指定のない歌20 『新古今和歌集』1・2・『拾遺愚草』2・『拾遺和歌集』1・『詞花和歌集』1・『千載和歌集』1・『新勅撰和歌集』1・『続古今和歌集』1・『歌枕名寄』1

②近き此の歌3 『挙白集』2・『逍遊集』1

③頃日の人の歌9 悪歌『麓のちり』3・出典不明2／秀歌『奉納千首和歌』4

『麓のちり』は、河瀬菅雄の編によるもので、天和二年（一六八二）刊。三首の作者は、藤原之雄・忠至・月券である。一方、『奉納千首和歌』は、長雅の編によるもので、元禄九年（一六九六）に刊行された。これら四首の作者は、有賀長伯・水田長隣・志水性知（兼武）・下村嘉雄である。実際に歌の作られたのは、刊行された年より早いと考えられる。長隣の歌は、当時秀歌として有名だったらしく『以敬斎聞書』

にも記されており、日下幸男氏は、この歌を『文翰雜編』にも載っているので元禄五年（一六九二）頃の詠かと述べられている^②。

さすれば、現在見ることでできる『五字之大事』とは、最終的には、元禄九年（一六九六）前後以降から、長雅から氏朝に伝授のあった宝永二年（一七〇五）までの間に、長雅の手によつて成立したものであると考えられる。

それでは、延宝二年の長孝の伝授の際は、どのような形をとっていたのだろうか。それを考える手がかりは長孝の奥書にある。もう一度長孝の奥書を参照されたい。長孝は、この『五字之大事』とは本来面授口伝であり、文に書かれておらず心の中に刻みつけるだけであると言っている。しかし詳細は心に刻み付け難いので、暫くの間文句を書き記しておくと言う。この目は、代々二條家に伝わってきたとする。ここで目と言っているのは、○や△で表された伏せ字五字のことと考えられる。詳細が心に刻み付け難いとはどういうことであろうか。これは、詳細が、複雑で正確に覚えきれないということを示唆するのではなからうか。ここで前述した本文の構成をもう一度振り返りたい。本文五字各々の秘伝は、それぞれ二部に分かれ、前半の陰陽五行の密説で説かれた漢文部分と後半の証歌を伴う漢字仮名混じり部分とに分かれる。陰陽五行で説かれる五字は、それぞれに五位・五行・五方・五季・五臓・五色・五常・五角との対応を持ち、『太極図説』や易等を論拠として論が展開していく。そして対応の説明が終わったところから、いよいよ和歌の詠み方の眼目の説明が、証歌と共になされるのである。長孝が、心の中に刻み難いので文言に表すとしたのは、この陰陽五行で説明された冒頭部五字と、位・行・方・季・臓・色・常・角の対応だったのではなからうか。確かに多くの出典からの説明になつており、正確に暗記するのは難しいと考えられる。延宝二年の長孝の伝授は、本文各々の章前半の陰陽五行の密説で説かれた部分が主だったと推測される。そして、後半各々の章の証歌を含む歌の詠み方に関する説明は、伝授されたものに、長雅が後から大幅に増補したのではなからうか。

これらのことから、現在見ることでできる『五字之大事』とは、長孝からの陰陽五行説の五字の伝の後に、長孝からの伝授を元に、長雅が同時代の歌を取り入れて詠み方の極意として元禄九年前後から宝永二年の間にまとめたものであるといえよう。『悪歌』と『秀歌』の選び方からは、長雅門と菅雄門との対立のさまも読みとれる^④。

八 『五字之大事』の目的と序文

さて、長雅がどういう意図を持って『五字之大事』をまとめたのかを考察するために、序を取り上げる。(句読点は、適宜補う。)

大和歌は二神よりはしまるといへとも、素戔鳴尊^{ヒコササネ}他の國より音律礼楽もいまた渡らざる以前に、五章に五律を備へ、三十一字に三百六十律を兼、程拍子を定め政の輔とし、此國の風俗となさしむ。しかのみならず、上五七五下七々の句を陰陽にわかし、五句を五行にあて、三十一字を一世として人躰になぞらふ。然ありしより以降、樵夫^{コノカタ}芻蕘^{ヒコクサカリ}の口遊も五七五七々の程拍子いさゝかたかふ事なし。されは熊野権現、何事も衰へゆけと、此道こそ末の代にもかかはらぬものなれとありし御示現けにもとこそ覚へ侍れ。抑人丸・貫之・定家を和歌三尊とたて侍る。人丸の御事は、神祇なれはいとまかしこし。貫之延喜の聖代に出て、古今集を撰はる。古今集は、撰集の龜鑑、和歌の大本、天下の至宝也。其功幾多^{イダクナク}。さて亦定家卿世に出て、和歌を中興し諸鈔物を述して二條家の正統をたて奥旨を傳へ給へりしより、敷鳴の道にまよはず、和歌浦の玉をひろふ輩おほくさまさまになりにつけり。それより後、頓阿法師出て大功をなし、玄旨法印並なき道の先達にて、公家地下に弘く家の正統奥旨を残しをかれ侍りき。もとも五字三義十一箇といへる事は、其名目もつたふる事難き事になむ侍る。しかあれと、此道に入たらん人、此習なくては闇夜に山峽を渡るかことくならんかし。

この序は、二つに分かれる。前半は、引用七行目「御示現けにもとこそ覚へ侍れ」の部分まで。和歌の始原を陰陽五行の密説で説き、和歌の道がいかなる世にも不変であることが書かれている。この部分は、宗祇、吉田兼俱から長雅まで伝授のなされた『八雲神詠伝』の「超大極秘之大事」に典拠を見出すことができる。『八雲神詠伝』は、素戔鳴尊の「八雲立つ出雲八重垣」の歌にまつわる伝であるが、そこに四妙の大事という秘伝があり、字妙・句妙・始終妙の箇所には、次のように書かれている。(便宜上、以下a b cで表す。)

a 此神詠二四妙アリ。字妙・句妙・意妙・始終妙也。先字妙トハ、三十一字ノ数一月三十日ト極リテ又朔日ト始ル、天道ノ循環無窮ノ道理也。(中略)字書ニモ三十一日世トアリ。一世ヲ三十年ト極テ三十一日ト始ル、是又万代不易之理リ也。句妙ト云ハ、一首ヲ分テ五句ニ定ム。是人躰也。則五行五大五臟五音五色等ヲ主ル森羅万象、此五句ヲ出ル事ナシ。五句三十一字ニ極メタマフルニ深秘ナル道理

有。是音律二カナヘリ。天竺ノ三百六十律ヲ唐土ニ八十二律トセリ。其十二律ヲ五句ニツム音律、程拍子二叶ヘリ。

c 始終妙ト云ハ、二神ノ神詠ヨリ始トイヘトモ、其理リ葦牙ニフルノ風ノ音ニフクメリ。サレハ天地ト共ニ始レル歌ナルヘシ。ワキテ大日本ノ風俗ノ歌ナレハ、五句三十一字変スル事ナク、此國ノアランカキリ断滅ナキ誓約アリトソ。万ノ道ハ衰ヘ行トモ此道ハカリ末代ニモ絶ヘカラスト熊野権現御示現アラタ也。可貴可仰。

「字妙」では、「三十一字を一世」とする理由が述べられており、この部分は、『五字之大事』序の冒頭に対応する。

また、次の「句妙」に見える「五行五大五臟五音五色等ヲ主ル森羅万象、此五句ヲ出事ナシ」という部分こそは、まさしく『五字之大事』各々の章の冒頭に見える和歌の五字と五位・五行・五方・五季・五臟・五色・五常・五音の対応の根拠(注(3)参照)であり、これから述べ始めることを示唆しているのである。さらに「句妙」では、『五字之大事』序に見えた音律や程拍子の言及もある。『五字之大事』序最後の「熊野権現御示現」とは、「始終妙」にみえる「万ノ道ハ衰ヘ行トモ此道ハカリ末代ニモ絶ヘカラスト熊野権現御示現アラタ也」からである。この「熊野権現御示現」は、『詠歌大本秘訣』序にも『戴恩記』にも見え、『新古今和歌集』の西行の歌の詞書に見える話である。以上、序の前半は、『八雲神詠伝』を典拠に、和歌の徳と和歌の道がいかなる世にも不変であることが述べられている。

次に、『五字之大事』序後半は、二條家に繋がる和歌の流れを述べ始めるが、和歌の巨星、人麿・貫之・定家を「和歌三尊」と捉えている。この「和歌三尊」という言い方は、西田正宏氏が『詠歌大概安心秘訣』・『戴恩記』にも見えることを指摘され貞徳独自の見解かもしれないとされている。⁷⁾長雅は、さらにこの系譜に頓阿・幽斎を追加する。長雅の『神國和歌師資相傳正流血脈道統之譜』の幽斎の項には、「人丸・貫之・定家・頓阿・幽斎、これを五尊と謂ふ」とある。頓阿に関しては、長雅と同時代の堂上でも高い評価を受けていた。けれども、幽斎の扱いに関しては、堂上と地下の長雅等は、逆である。堂上では、幽斎は、古今伝授の中継ぎとしての貢献が評価されるのみで、歌・歌学ともに、ほとんど注目されることはない。しかし、地下では、神格化され、尊崇されている。¹⁰⁾

幽斎は、二條家の奥旨を残したが、「五字三義十一箇」ということは、その名目すら伝わるのが難しいとしている。が、和歌の道を進む人には、この習いは、必要不

可欠であるとして、ここに伝えるということを行っている。これこそが長雅が、『五字之大事』をまとめた理由である。ここで「三義・十一箇」とは、長孝・長雅によりまとめられた『詠歌大本秘訣』で説かれている詠み方の教えである。「三義」は、『詠歌大本秘訣』巻一「三義之大事」であり、「十一箇」とは、『詠歌大本秘訣』巻二「十一箇之大事」のことである。「三義」とは、風体・詞・心のことであり、その名称は、伝本によって異なるものもある。国文学研究資料館本（ナニ―三六九）では、風体・莊嚴「詞也」・意識であり、宇部市立図書館本（国文学研究資料館マイクロフィルム）では、「三義」は、意識「心」・容貌「風体」・莊嚴「詞」となっている。また『五字之大事』の本文第四章に「亦制の詞のやうに古き詞の二字三字を取合せ五文字とし、三字四字を取合せ七文字として我物としたる金玉もあり。委は三義の大事莊嚴の段に譲りて略之訖」というように、「三義」の一つが、莊嚴であることが書かれている。一方、「十一箇」は、前掲国文学研究資料館本では、一盜・二類・三病・四禁・五無心所着・六俗・七難・八傍・九平・十誹・十一唐衣。宮内庁書陵部本（四六七―九）「国文学研究資料館マイクロフィルム」では、盜・類・病・難・無心所着・俗・制・新・平懷・誹・唐衣となっている。内容は、一盜（便宜上国文学研究資料館本の番号を使う）が、制の詞・主ある詞の使用禁止。二類は、等類への注意。三病は、歌病のこと。四禁／難は、制の詞・用捨詞・嫌詞・歌会での態度。五無心所着は、無心所着の禁止。六俗は、俗言の禁止。七難／制は、不吉な詞・謡の詞の禁止。八傍／新は、新の意味。九平／平懷は、平懷を避けること。十誹は、新言を言うことを慎むこと。十一唐衣は、同じような歌を何度も詠むことを避けることである。「十一箇」は、概して禁止事項が多い。「三義」は、幽斎の『詠歌大概抄』からの引用が多く、風体では、約半分、心でも三割近くにする。

前掲国文学研究資料館本の明和九年の奥書には、「三義十一箇の名目は昔よりの口受にて二条家世々伝へ来しを、長雅初学のため諸抄のうちより抜集て五巻となし畢。尤其功少からず、よく集たりと云へし」とあり、「三義十一箇」は、初学の人向けの教えであったことが窺われる。『近世古今伝授史の研究 地下篇』によれば、『詠歌大本秘訣』は、長雅から九人程に伝授されており弟子達はさらに伝授を繰り返したため、現存する伝本も多い。それに対し『五字之大事』は、以下に述べる理由から、「三義十一箇」よりも上級者向けであったと思われる。本文第三章に、教えを述べた後、「但是は入たたる人への相伝の上の沙汰也。初学の人にはふるめかしくとも先歌数をよみて口馴たるかよき也」とあり、上級者向けであったことを示している。また、『近世古

今伝授史の研究 地下篇』の氏朝への伝授の順序を見ると、いわゆる古今伝授の前の伝授は、『詠歌大本秘訣』から始まって『五字之大事』付近で終了している。詠み方の教えとしては、「三義十一箇」が、初心者用で、「五字」の方が上級者向けであることを示していると言えよう。『五字之大事』が、どういう者に伝授されていたかも考えてみたい。もう一度『奥書』に基づく伝来を参照されたい。長雅から、氏朝・長隣・長伯・井長如・嘉珍・正言に伝授があった。しかし、伝本⑨の奥書からは、嘉珍とは、短山正言ではないかと読みとれる。また、③の奥書は、長雅から井長如宛ではあるが、以下一連の奥書の流れでは、長雅から正言への伝授となっている。ということは、正言とは、井長如ではないかと考えられる。井長如も長と名がつくからには、全伝の伝授があったと思われる。とすれば、『五字之大事』は、現在判明している伝本からは、いずれも長雅から全伝を伝えられた高弟達に与えられたものであると言えよう。

貞徳は、『戴恩記』の中で伝授されたものを列挙した後に、次のように述べている。^⑪
此の外いくらかも相傳の物ども候へども、爰にかゝず。又紙面にのせず、詞にて傳ふる秘事多し。定家卿より幽斎法印まで、一器の水を一器にうつすやうに口づから傳へ給しなり。是よみかたの口傳と申す秘事也。詠歌大概にもさるよみかたあるまじきやうに、人のおもふべけれど、大概と書にてある事をしるべし。

貞徳の段階では、文字にされていないかった「よみかたの口傳と申す秘事」が、『五字・三義・十一箇』ではなかったかと考えられるのである。そして、『五字之大事』のほうは、『八雲神詠伝』の「超大極秘之大事」という秘伝を背景に展開する、詠み方の最奥秘ではなかったかと位置づけられるのである。

九 おわりに

従来取り上げられなかった『五字之大事』の成立・伝本・伝授の位置等について考察した。『五字之大事』とは、元禄九年前後から宝永二年の間までに、長雅が、長孝からの伝授を元に弟子達の歌をも入れてまとめた詠み方の教えである。そこには、口伝でしかなかった先人の教えを、正しく系統立てて高弟達に残したいという、流派を率いる者の熱い思いが込められているのであった。

注

- (1) 『人物百談』（森繁夫・一九四三年・三宅書店刊）に享保十九年に円山賀納が、長伯より『五字大事極秘事』を伝授した旨が記されている。
- (2) 『近世古今伝授史の研究 地下篇』（一九九八年・新典社刊）六一頁。
- (3) 五字の対応 ×震木東春肝青仁角／△離火南夏心赤礼徴／□坤土中央土用脾信宮／◇兌金西秋肺白義商／○坎水北冬腎黒智羽
- (4) 長雅門と菅雄門の対立については、神作研一氏の『難三長和歌』をめぐって―元禄地下二条派歌論の位相―（『和歌 解釈のパラダイム』・一九九八年・笠間書院刊）に指摘がある。
- (5) 三輪正胤氏の『歌学秘伝の研究』（一九九四年・風間書房刊）に、歌学者流『八雲神詠伝』の改作者は、貞徳との指摘がある。
- (6) 引用は、賀茂別雷神神社蔵本『八雲神詠和歌三神化現大事』（国文学研究資料館紙焼き）による。
- (7) 『松永貞徳と門流の学芸の研究』（二〇〇六年・汲古書院刊）二六頁。
- (8) 引用は、中田光子氏蔵本（国文学研究資料館紙焼き）による。
- (9) 『松永貞徳と門流の学芸の研究』二六六頁に指摘がある。
- (10) 上野洋三氏の『元禄和歌史の基礎構築』（二〇〇三年・岩波書店刊）一一五頁、西田正宏氏の『幽斎（学）の享受』（『細川幽斎 戦塵の中の学芸』・二〇一〇年・笠間書院刊）に指摘がある。
- (11) 引用は、『日本古典文学大系』（岩波書店刊）による。

The birth of “Wakadenjugojinodaiji” and Hiram Chouga

IIBUCHI Yumi

abstract

“Wakadenjugojinodaiji” is the book that was written about the way of composing a waka poetry in the first term of the Edo period. No one has studied about “Wakadenjugojinodaiji” yet. But it is worth studying about. So I tell about the birth of “Wakadenjugojinodaiji” in the paper.

“Wakadenjugojinodaiji” was written by Hiram Chouga between 1696 and 1705, because some waka poetries on it were given by “Hounousensyuwaka” published in 1696, and he passed it down Houjou Ujitomo in 1705 for the first time in his life. He wove one critique from the lesson of his teacher Mochizuki Choukou and the wisdom of the Nijou group.

The book is useful to advanced learners. In it he told about five points to compose a waka poetry. These points were the secrets in those days. They were founded on the theory “Choudaigokuhinodaiji” on the book “Yagumoshinneiden”.

The reason that he had written “Wakadenjugojinodaiji” was that he had hoped to pass the secrets down to leading disciples correctly.

On the other hand, in the book “Eigataihonhiketsu” he told about three points and eleven points to compose a waka poetry. These are suitable for beginners.

Keywords : “Wakadenjugojinodaiji”, Hiram Chouga, “Choudaigokuhigojiden”, gojisangijuuikka, “Eigataihonhiketsu”